

接続期カリキュラム（２）

— 小学校教育から中学校教育へ —

杉山 直子

広島都市学園大学子ども教育学部

要 旨

本論文では、「中１ギャップ」を中心に小学校から中学校における接続期カリキュラムについて考察した。大学生を対象に「中１ギャップ」について質問紙による調査を行い、被教育者の立場から「中１ギャップ」の原因を明らかにし接続期の課題を明確にしようと試みた。アンケート結果から人間関係を中心に課題的状況が生じていることがわかり、被教育者側の学びの総体として接続期のカリキュラムを検討していく必要性を唱えた。

キーワード：接続期カリキュラム，中１ギャップ，特別活動，教員養成

はじめに

「接続期カリキュラム－幼児教育から小学校教育へ－」（『子ども教育学部紀要 第3巻 1号』）では、幼児教育と小学校教育の接続期におけるカリキュラムの重要性を述べた。今回は、小学校と中学校における接続期のカリキュラムの課題を「中１ギャップ」における当事者の困惑の原因を中心に考察する。筆者は1983年から現在まで、中学校・高等学校教諭免許取得希望の大学生と講義において関わり続けている。授業において、毎年中学校での体験の振り返りをする中で、中学校期に困惑と葛藤があることが気になっていた。困惑・葛藤は個々様々であるが、基本的には中学校の体制や学び方や生徒指導の方法と共に、その中心に同級生や上級生、教師との関係性に係る課題が大きく存在するようである。こうした困惑や葛藤を把握するために調査を行い、その結果からカリキュラムの在り方について考察する。

1. 接続期カリキュラムの必要性

（1）「中１ギャップ」の捉え方

「中１ギャップ」は「小学校から中学校に進学した際、不登校やいじめの増加などの問題が生じる現象のこと。学習内容や人間関係の変化、心身の発達（思春期）など幾多の原因が作用し合って起こると考えられている」（朝日新聞出版『知恵蔵』）と記述されているように、一般的に中学校初年次に生じる様々な変化や原因により引き起こされる問題的现象として捉えられている。

平成20年改訂「中学校学習指導要領解説 特別活動編」には、学習指導要領「改善の具体的事項」で「中１ギャップ」の言葉が用いられ、ここでは「集団の適応にかかわる問題」

として把握されている。(p.3)

平成26年文部科学省国立教育研究所「生徒指導リーフ」によれば、中1ギャップは、「問題行動等調査」の結果を学年別に見たときに、小6から中1でいじめや不登校の数が急増するように見えることから使われ始め、今では小中学校間の接続の問題全般に「便利に」用いられている語であるとする。「中1ギャップという語に明確な定義がなく、その前提となっている事実認識(いじめ・不登校の急増)も客観的事実とは言い切れない」ため、中学校で顕在化する問題も小学校からであることが記されている。

平成29年改訂『中学校学習指導要領解説 特別活動編』では、特別活動の内容に関わる活動の一つである「学級活動」でのみに記されている。「ガイダンスの趣旨を踏まえた指導」(第5章の第3の2の(3))、すなわち「学校生活への適応や人間関係の形成、進路の選択などについては、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うこと。特に入学当初においては、個々の生徒が学校生活に適応するとともに、希望や目標をもって生活ができるよう工夫すること。あわせて、生徒の家庭との連絡を密にすること。」(p.66)を解説する部分で「中1ギャップ」の言葉は登場する。解説は以下の通りである。それまでの小学校での生活と異なり中学校生活は、まず、「教師と生徒及び生徒相互の人間関係も多様」になること、「学習面ではその内容等が深化する」こと、「自我の目覚めや思春期における不安や悩みなどの新たな発達上の課題に直面する」など生活環境や学習環境、そして自己が大きく変化する。「特に、中学校入学当初は、小学校から入学してきた生徒による新しい集団、教科担任制や新しい教科、部活動の開始などの変化に興味・関心をもち、新たな決意や目標をもちやすい時期」でもあり、「生徒同士や生徒と教師の新たな人間関係や未知の事柄への不安をいだく時期」でもあるが、「その中で、いわゆる中1ギャップにより、新しい学習環境や人間関係につまずいて、学校生活への不適応をおこすことも少なくない。」そこで、学区内の小学校と中学校の連携、中学校への体験入学、保護者等への説明会など、地域全体で取り組んでいく工夫などを重視している。(p.67) 前改訂と比べて集団から学校生活へと不適応の範囲は広がっており、対応の重要性も深まり、異校種連携・接続と関わり問題状況は捉えられている。

以上から、まず、同じ文部科学省でありながら国立教育政策研究所と学習指導要領と捉え方が大きく異なることがわかる。確かに「生徒指導リーフ」のように「中1ギャップ」の言葉に振り回されず、子どもたちの実態に即して日々の教育活動を懸命に行っていくことは大切であるが、こうした言葉から現在の子どもの実態を理解しようとするのを忘れてはならない。また、「学習指導要領」では指導について具体的に記載されているが「中1ギャップ」を学校への不適応であるという捉え方に疑問を持つ。学校教育における指導は適応のみを求めるのでは、子どもたちの主体性は育たない。子どもの主体性を導き出すような指導こそが重要と考える。また、中学校生活のすべてに適応しなければならないのであれば、様々な個々の事情を知るものは過酷と思うであろう。指導概念の問題と共に、

学級活動のみでは対応できない学校全体の問題として捉え対応していくべきである。

「中１ギャップ」について次のように記している事典がある。「中学校入学後に、学習や生活面で大きな環境変化に適応できず、不登校やいじめが増加する現象。ギャップ（大きなずれ）には二つあり、一つは、小学校では少なかった問題行動が、中学校に入ると急増するという現象としてのギャップ、もう一つは、学校制度や指導の方法が大きく変化するという環境のギャップである。」（『日本大百科全書』）言葉の元の意味である「ずれ」が何と何の間で生じているのかを考えることが「中１ギャップ」の本質に近づく。こうした２つの「大きなずれ」は、教育を行う側である学校・教師と被教育者である子どもたちとの間の「大きなずれ」ではないかと筆者は考えている。次の節では、このことについて具体的に述べる。

（２）当事者から学び、対応するカリキュラムへ

これまでも、中等教育において少年非行、学級崩壊、いじめ、不登校など問題は多い。学校は子どもを育てる場であったはずなのに、場合により間違った生き方を教えたり、人格や一生を壊したり、命を奪う原因となったりする場にもなり得る。筆者は、どのような場合に問題状況が生じ、その問題が何故解決できないのかについて不思議に思ってきた。その解決の糸口は、学生たちが被教育者の立場で中等教育時代を振り返る機会を持つ中で教えてくれた。それは学校・教師と子どもたちの「大きなずれ」や矛盾であった。学校・教師たちにとって当たり前のことが、子どもたちには大きな違和感と困難さを持つのである。そしてそれは、教師の教育的要求と子どもの成長への要求の「ずれ」でもある。教師を目指す学生には、多様である子どもたち一人ひとりを理解し他者感を持ってほしいと思い、互いに中学生時代にどのようなことを経験したか、困ったこと・戸惑うことはなかったかなどを授業内でアンケートを取り、学生にフィード・バックをし、場合によっては当事者自身の声を聴き合い、対応を考える機会を設けてきた。こうした機会に学生から出された具体例は、時代とともに変わり、校則と体罰のセットで縛られていた時代、内申書で縛られていた時代、自分について積極的に発言しない時代、いじめの経験を持つ学生が生じはじめた時代、人間関係に悩む時代と変遷してきている。

象徴的な具体例を挙げれば以下のとおりである。服装や持ち物が比較的自由であった小学校とは異なり、中学校では画一的と言われるほど校則が厳しくなり、校則を守らなければ、学校や教師によっては問題児として扱われ、時には体罰もある。体罰は素直に受けるもので、「人間の本性として痛いと思われる状況は避けたいのに、よけたりすればさらに大変なことになる恐怖をわかりますか？」という言葉も出た画一と強制の時代。また、予習・復習や宿題や部活動そして塾に忙しい中で、ボランティアをすべきと内申書を挙げて強要された例、校則を護らない場合は内申書に記入すると言われた例が多い時代。そして、自分を振り返りたくない、周りと比較されるようで嫌と思う学生が多く、話し合い・発表が難しい時代。それと徐々に重なってきた、いじめられたことやいじめたこと、傍観者であっ

たことなどで自分自身が傷ついた過去を持つ者が多く存在する時代。現在は、他者との関わりに関しては二極化が見受けられる。

どの時代も共通して以下のことに困っている。中学校での教科担当制への戸惑いや教員の名前を覚えられないことや教師により授業の方法や学級の捉え方や教育観が異なること。学級担任が小学校のように多くの時間を共有していないため、自分や学級の状況をあまり理解していないこと。学級担任は個々人や学級を理解しているように見えないこと、その一方で「悩みを相談しなさい」と言われること。学校では登校から下校まで時間に追われること。教科担当者から各々宿題が出されて家庭での時間がないこと。定期試験となり、広い試験範囲と試験期間に結果を出せる勉強に仕方がわからなかったこと、試験の結果が張り出されること。上級生に目を付けられないようにしないといけないこと。部活動を中心として生じる上級生との関わり方が難しいこと。複数の小学校から集まった同級生と友達をつくりにくいこと。以上、すべての学生ではないが、年代を超えた多くの声である。

こうした当事者の言葉を理解していくと、中学校は従順な人間を養成する場所なのか、理不尽さを持ったり社会では許されないことであったりしても適応しなければならないのかと疑問に思うこともある。学校・教師が知らない、知ろうとしない、知っているが大きな悩みとまでは認識していないのではないか。学校や教師にとって子どもたちに存在する「かくれたカリキュラム」は見つけ出し、その意義を問い、子どもたちの学びの総体としてのカリキュラムとして顕在化することが必要ではないか。そのため、まずは、知ることが大切である。こうしたことから、2017年から受講者である大学2年生を中心に、「中1ギャップ」について、当事者としての状況を一部でも理解するために調査することにした。

2. アンケートの項目と結果

アンケートは、独立行政法人大学の中学校教諭免許状、高等学校教諭免許状の取得を希望し教職課程を履修している3学部を対象に、2017年度後期（2017年12月）、2018年度後期（2019年度1月）に行った。論文にまとめることについては、大学名・個人名は明らかにしない条件で学生から了承を得ている。アンケート回答者数は、2017年度は76名、2018年度は81名であった。

アンケートの項目は、「学級に関すること」、「学級担任や教師に関すること」、「学習に関すること」、「中学校生活に関すること」、「部活動に関すること（部活動に入っていない方は、記入しなくてもよい）」、「上級生（先輩）について」、「その他の困ったこと」であり、各々に細目をつくり、該当するものにチェックをすることとした。細目は事前に行った「中学に入学して困ったこと」に関しての自由記述をまとめたものである。理由に関することは、複数回答も可能とした。「その他」には自由に記述ができるようにした。また、「小学校と異なる中学校の学習や部活などについての説明が行われた時期」、「中学校に慣れた時期」、「中学校時代は体力的、精神的心理的につらかったか」に加えて「高等学校に入学し

て困ったこと」、「大学に入学して困ったこと」の質問項目も加えた。なお、自由記述については、そのままの文を掲載し、「特になし」「なし」は掲載していない。

（１）学級に関すること

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	学級に多くの知らない同級生がおり困った。	21名（27.6%）	29名（35.8%）
②	同学年の学級数が増加し同級生の数が増加し困った。	9名（11.8%）	13名（16.0%）
③	小学校時代と友人との関係が変わってきた。	26名（34.2%）	31名（38.3%）
④	学級の姿が小学校時代とは異なってきた。	25名（32.9%）	26名（32.1%）

⑤ 「その他」の自由記述は以下の通りである。

「隣に風呂に入らない学生がいて困った」、「移動教室が増えた」、「仲の合わない転校生がいた」、「小→中で転校したので知らない人しかいなかった」、「受け身姿勢だったので困ったことはない」、「教師１人１人とつながりがなくなった」、「学校に友人が少なく最初しゃべる人がいなかった」、「入った部活で一緒だった友だちと付き合うことが多く、一部の人しか知らない」。(2017年度)

「授業の体制や学校の規律の変化」、「ほとんど小学校から繰り上がりだったので困っていない」、「同級生の大半が馬鹿で学校がつまらなかった」、「体育などペアを作るときあせった」、「部活が毎日あったこと。全国をねらうスポーツを小学校ではやっていたため週４とかだったが、毎日とは思わなかった」、「教科ごとに先生が違ったので、授業で分からないことが聞きづらかった」、「先生の人数が多すぎて、顔を覚えるのが大変で困った」。(2018年度)

以上の結果から、同級生について、上記に挙げた理由で困惑する者が約30%程度存在することが分かった。学校において他者と関わることの意味や必要性、その方法などを小学校から身に付けておくことや、それを互いに共有していること、さらに中学校で求める関わり方の意義を知る機会やその体験の機会などを持つことの必要性がわかった。

（２）学級担任や教師に関すること

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	学級担任が小学校のようにいつもいないので困った。	8名（10.5%）	16名（19.8%）
②	小学校のときは何かあると学級担任から気にかけてくれたが、中学校では違うので困った。	3名（3.9%）	9名（11.1%）
③	小学校のように教師がわかり易く教えてくれないので困った。	6名（7.9%）	8名（9.9%） うち1名国語記入

④ 「その他」の自由記述は以下の通り

「部活動選びの際顧問のことがわからないまま入部届を出した」、「小学校のころは気軽に質問できていたが、中学校になると、それぞれの先生と仲よくならなくてはいけなかった」、「教科担当の先生が一年ごとに変わった教科が合った（とても困ったわけではない）」、

「頑固な先生がいて困った」,「中一のころ, (2) のことについてはあまり困った記憶はありません」(※),「部活の顧問が怖かった」,「特に困らなかったが副担任の意義が分からなかった」(2017年度)(※(2)とは項目番号であり「学級担任や教師に関すること」)
「基本は友達がいたので「困ること」はなかった」,「中学校の教師も親身に接して下さるので困っていない」,「担任に依存しなくていいので逆に楽だった」,「先生も体罰あたり前でとても仲が悪かった」,「もう名前も思い出せない」,「中1のとき特に先生達が厳しかった(授業中, 学校生活)」,「同じ“数学”という教科でも担当の先生によってわかり易さが異なり, 不公平だった」,「教科ごとに先生が変わるので, 授業のリズムがバラバラで慣れなかった」,「教科ごとに先生が違ったので, 授業で分からないことが聞きづらかった」,「先生の人数が多すぎて, 顔を覚えるのが大変で困った。」(2018年度)

教師に対しては部活動を除いてはあまり困ることはないようである。しかし, 教師が共有すべきこと(教え方や授業リズムなど)については課題があることや, 学級担任がいないことについての困惑は増加をしており, 人間関係や集団の悩みから学級担任を求める姿は今後も増加する可能性がある。学級担任の在り方を検討する必要性があるだろう。

(3) 学習に関すること

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	新しい教科(英語, 数学)の勉強の仕方がわからなかった。	15名(19.7%)	18名(22.2%)
②	試験の形態(中間試験, 期末試験)への対応への仕方がわからなかった。	27名(35.5%)	33名(40.7%)
③	小学校と同じように勉強をしていたら学習内容がわからなくなった。	11名(14.5%)	7名(8.6%)
④	学習指導に関して, 教師で共有できていないことがあり困った。	13名(17.1%)	12名(14.8%)

付け加えの記述:「1～3組と4・5組で担当が違う(そのため教え方などが異なっていた)」

⑤ 「その他」での自由記述は以下の通り

「小学校のときは違って授業中だけでなく家で勉強する時間が増えた気がします。」「体育・技術・美術の実技系が困った」,「そもそも小学校の頃は勉強したことがなかったので, ギャップを感じることなく勉強できた。」「勉強方法は塾から教わった。」「小学校では満点が当たり前だったのに, 中学校では高得点を取るのすら難しかった。」「体育が小学校に比べてかなり厳しくなったこと」,「試験で順位がでることにプレッシャーを感じた。」「順位付けが行われるので, 学力格差を受け入れることが難しかった→認めたくない劣等感」(2017年度)

「自主勉や宿題提出が厳しくなくてやる気が出なかった。」「小学校まで単元別に教科書会社のテストをしていたのに対して, 中学校では一定期間で習った授業内容から先生が出題するテストを実施していたため傾向がわからなかった。」「特に大丈夫だった(困らな

かった)」(2018年度)

以上より、「試験の形態（中間試験，期末試験）への対応への仕方がわからなかった」者が35～40%と多く，具体的な説明が事前にも事後にも必要であることがわかった。

（４） 中学校生活に関すること

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	中学校では持ち物，髪型，制服，靴下，靴などのきまりが多く，守ることが当たり前で困った。	31名（40.8%）	26名（32.1%）
②	給食などの昼食の時間が短くて過ごしにくかった。	19名（25.0%）	12名（14.8%）
③	毎日の学校生活が辛かった。	4名（5.3%）	8名（9.9%）
④	学校生活だけでなく，その他家庭や塾などの生活も加えて辛かった。	6名（7.9%）	7名（8.6%）

⑤ 「その他」の自由記述は以下の通り

「校則が多すぎました」，「ゲームセンターが禁止されているので自分だけゲームセンターに入れなかったりした。」，「給食の量も増えて困った。」，「先輩が怖かった」（設問１（５）でも同じ記述），「小学校の頃と違い，やんちゃな人との関わり方が分からなくて困った。」，「特に部活がきつかった（・朝練など・・・）朝起きるのが辛かった」，「反抗期があった。（先生との衝突）」，「休み時間が短く，移動教室だと大変だった。」(2017年度)

「多少変化したが困るほどではない」，「楽しかったし，生活に関してはそんなマイナスな考えはなかった」，「いじめられるようになった」（※設問３の精神的心理的につらかったに✓，中学校に慣れなかったに✓），「中学校は学区で指定されるので，歩いて10分の距離の学校に行けず，歩いて40～1時間の学校に行く必要があった。」，「勉強が楽しくなくなった。」（※設問１（２）で先生たちが授業中や学校生活で中１のとき特に厳しかったことを記述），「学習と部活を両立した生活」，「話したい訳ではないのに他の人と話さなければならなかった」，「担任や周囲の教師に嫌がらせを受けていた件を相談しても対応しなかった。親も然り。」（※設問２の慣れなかったに✓，設問３の精神的心理的につらかったに✓），「特に嫌なことはなかった」，「家からかなり遠い学校だったので通学が大変だった」，「あまり気の合う友達がいなかったので，休み時間が苦痛に感じたことがある」，「部活がはじまった。テニス部の人数は多かった。」，「毎日寝ているのに，授業中に眠くなって我慢するのがたいへんだった」（2018年度）

割合としては中学校での決まりに関することが高いが，自由記述において「いじめ」，「嫌がらせ」があり「教員に相談しても対応しない」ことで精神的心理的につらい中学校生活を送ることを余儀なくされた２名が存在することがわかった。

（５） 部活動に関すること（部活動に入っていない方は，記入しなくてもよい）。

なお，部活動に入っていた学生は2017年度58名，2018年度64名であり，割合の記述が２つあるのは，前者は全体における，後者は入部者における割合である。

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	部活動での練習が大変だった。	37名 (48.7%, 63.8%)	28名 (34.6%, 43.8%)
②	部活動での先輩との付き合い方がわからなかった。	21名 (27.6%, 36.2%)	24名 (30.0%, 37.5%)
③	部活動顧問の教師の指導に困った。	16名 (21.0%, 27.6%)	19名 (23.5%, 30.0%)

④ 「その他」の記述は以下の通り

「校則が多すぎました」,「部活をしていると帰りが暗くなった夜遅くになって, 自由な時間がなくなって困った」,「先輩が怖かった」,「女子1人でサッカー部に入ったので大変なことだらけだった」,「部活動でやる気がある人とそうでない人とのギャップに困った(生徒について)」,「強制的に入部」(2017年度)

「部活動での同級生, 後輩との付き合い方がわからなかった。」,「部活仲間との関係」(練習や先輩との付き合い方の2つに✓),「部活動で部員との人間関係が悪くなった」(部活動顧問教師の指導に困ったに✓),「他の人が言うことを聞かなかった(部長だった)」(部活動顧問教師の指導に困ったに✓),「そんなにない, 形式的な上下関係以外はかなり楽だった」,「先輩からの指導 もともと知り合い(同じ習い事)だった人以外の人」(先輩との付き合い方がわからなかったに✓),「同期でも仲が悪い時期があり, どうすればいいかわからなかった。」(先輩との付き合い方, 部活動顧問教師の指導に困ったという2つに✓),「先輩も先生も優しくかったから良かった」(2018年度)

部活動については, 練習の大変さと, 人間関係の大変さ, とりわけ先輩との付き合い方に困惑する姿がある。部活動の先輩について, 下記の上級生の項目でも記されている。予想外に多いのが, 教師の指導に困ったことということである。

(6) 上級生(先輩)について

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	上級生(先輩)に目をつけられると思うと怖かった。	22名(28.9%)	19名(23.5%)
②	小学校の頃と比べて上級生(先輩)意識し, かかわり方がわからなかった。	28名(36.8%)	31名(38.3%)

③ その他の記述は以下の通り

「部長がとても怖くて部活動が怖かった。」,「小→中へエスカレーター式なので特に変わりはない」,「優しくかった」(2017年度)

「部活内で先輩によるいじめが問題になって部停になった。」,「ろうかで突然私に蹴りをいれてこられた」,「何が悪いのか分からないことで怒られ, どうすればよいかわからなかった。」,「縦のつながりは元からありフランクに接することができていたので特になし」,「上級生がサッカー下手くそで困った。」,「変なからみかたをされ, 対応にこまった。」,「あんまり困らなかった」(2018年度)

（７）その他の困ったこと

「生徒によって校内で暴れている人がいて怖かった」,「複雑な家庭の事情がある人への気付け合いが出来なかった。」,「男子校だったので女子と話せなくなった。」,「学校までの道のりが遠い」(2017年度)

「中学にほとんど行けなかった」,「恋愛の関係が出てきはじめた。(友人関係だけでなく)」,「テストで毎回、学年順位を出されてすごく気にした。」,「スクールカーストが始まりかけて」(2018年度)

自分とは異なる他者との関わり方に戸惑う姿がある。「男子校だったので女子と話せなくなった」という学生は、後に大学生の現在も女子と話ができない悩みを話してくれた。「中学校にほとんどいけなかった」という学生については後述する。新しい関係性や成績順位やスクールカーストなど外からのランク付けに困惑する姿もある。

（８）小学校と異なる中学校の学習や部活などについて、入学前から知っていましたか。

	項目	2017年度回答数	2018年度回答数
①	小学校で説明があり知っていた。	11名 (14.5%)	20名 (24.7%)
②	きょうだいがいるので知っていた。	27名 (35.5%)	19名 (23.5%)
③	入学前は知らなかったが、入学して中学校で説明があった。	15名 (19.7%)	26名 (32.1%)
④	全く知らなかった。	11名 (14.5%)	7名 (8.6%)

（９）中学校にはいつ頃慣れましたか。

①	1年1学期中	40名 (52.6%)	38名 (46.9%)
②	1年2学期中	15名 (19.7%)	28名 (34.6%)
③	1年3学期中	3名 (3.9%)	3名 (3.7%)
④	2年	3名 (3.9%)	6名 (7.4%)
⑤	3年	0名 (0.0%)	2名 (2.5%)
⑥	慣れなかった	0名 (0.0%)	4名 (4.9%)

1年生の間に慣れたと思う者は、2017年度は76.2%、2018年度は85.2%であるが、2018年度はばらつきが大きく、慣れなかったと答えた4名が存在している。今後、ばらつきがより生じ、慣れない者が増加するかは、継続した調査で検証が可能となる。慣れない者がいたという事実は、理由を理解し改善する必要があることを示している。

（10）中学校時代は体力的・精神的につらかったですか。

①	体力的につらかった	7名 (9.2%) (うち1名は3年のみ)	12名 (14.8%)
②	中学校時代は精神的・心理的につらかった。	21名 (27.6%) (うち1名は1年のみ)	20名 (24.7%)
③	つらくなかった	45名 (59.2%)	40名 (49.4%)

つらくなかった者が2017年度59.2%，2018年度は49.4%であるが，体力的精神的心理的につらかった者は2017年度36.8%，2018年度は39.5%と多い。この中に，中学校に慣れないままの者，学校に行けなくなった者の存在の事実，対応の必要性を示している。

3. 接続期カリキュラムを編成するために

アンケートの結果から，「中1ギャップ」は子どもたちの悩みを理解できない教師たちのギャップのように思われた。顕在化されているカリキュラムから，子どもたちが体験している見えないカリキュラムをまずは知り，対応することが問題の解決につながる。

(1) 子どもを学校生活の主体にしていくカリキュラムづくりへ

学校は社会の縮図と言われていたが，社会とは異なる状況の中で中学校生活を送らざるを得ない過去を持つ学生の存在がわかった。中学校生活への一方的な適応を求めることが，さらなる困惑を引き起こしていると思われる。中学校生活を営む主体は中学生であり，初年次には中学校生活を送る主体者にしていくカリキュラム編成が必要である。

(2) 「見えないカリキュラム」の把握から，人間関係に関わるカリキュラムづくりを

同級生や上級生そして教師との関わり方に困惑をする中学生像が見えた。異質な他者，集団との関わり方に困惑した者は中学校生活をつらいと感じていた。人間関係を構築する考え方や方法を，学校全体で共有・実践していくカリキュラムづくりが必要である。

(3) 乗り越えられる段差で編成するカリキュラムづくりへ

アンケートから，戸惑いや困惑から，問題解決に努力をする姿が見えた。しかし，理解・協力がなく，つらい思いへと変わる場合もあった。乗り越えたいという課題すなわち段差を，個々が乗り越えられる段差にし，課題解決の支援ができるような教師の指導力とそれを支えるカリキュラムづくりが必要である。

(4) 「中1ギャップ」の現状から，学校全体の総合的系統的カリキュラムづくりへ

2018年度の調査では学校に慣れなかった4名が存在する。そのうち1名はほとんど中学に行けなくなった。学級担任がいつもおらず困り，新しい教科の勉強の仕方がわからず，部活動での先輩や上級生との関わり方で困り，小学校時代の友人との関係も変わり毎日の学校生活が精神的心理的につらい状況であったことがわかった。この者は中学校について事前に全く知らなかったと記している。他3名は，部活動内での上級生からのいじめ，部活動内の人間関係での困惑と中学校生活でのいじめ，嫌がらせについて担任や教師から相談しても対応してもらえないことが理由であった。「中1ギャップ」は学校全体の問題であり，中学校生活での学びの総体として，総合的系統的なカリキュラム編成が必要である。

おわりに

久田敏彦が「学級崩壊」について考察していることが、「中１ギャップ」においても大きな意味を持つ。それは、「学校と子どもの関係性の問題現象が立ち現れたもの」である。この現象を、「制度文化の解体現象」として捉えること、「人間的コミュニケーションの喪失現象」として捉えること、以上からこうした問題的现象を「学校教育の再生」の機会となることとして捉えることで、解決が見えてくる。（久田：2001）「中１ギャップ」といった現象を学校教育再生にむけて問題解決していくことが求められているのである。

文献

- ・文部科学省：2008（平成20）年、『中学校学習指導要領解説 特別活動編』，ぎょうせい。
- ・文部科学省 国立教育政策研究所：2004（平成26）年初版，部分改訂2005（平成27）年「生徒指導リーフ「中１ギャップ」の真実」
- ・文部科学省：2017（平成29）年，『中学校学習指導要領 特別活動編』，東山書房。
- ・久田敏彦，子安潤，杉山隆一，永井芳和，船越勝，湯浅恭正 編：2001（平成12）年，『学級崩壊 克服へのみちすじ かわる教師 かえる教室 第Ⅳ巻 小学校高学年 自立と共同の物語を織る』，フォーラム・A。